2022-1 東大本番レベル模試　採点基準・採点例

第一問（４０点満点）

■採点の原則
① 全ての答案について各要素単独採点とするが、答案が全く日本語の文（章）の体をなしていないと判断される場合は、要素の有無に関係なく０点とする。
② 漢字の誤り、送り仮名の誤り、句点の抜けについては、一つごとに１点減点する。

問一

■形式上の不備
・文末表現は要素Ｅ参照

基準　配点８点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A 生者の世界と死者の世界は B 異なる時空に距てられた別の世界であり、C 生者と死者は互いの存在を意識しつつも D 触れ合うことはできないということ。（６６字）

■採点方法：各要素単独採点

■要素Ａ「生者の世界と死者の世界は」：２点

・「『二つの別の世界』とは何か」かの説明。
・傍線部の前文の「〈死者と生者の対話〉」およびそれを踏まえた傍線部の「二つの別の世界」に対応する。

■要素Ｂ「異なる時空に距てられた別の世界であり」：２点

・「『二つの別の世界』とはどのような意味で『別の世界』なのか」の説明。
・本文の「二五〇〇年近くも時を隔てた、また場所も文化もまったく違う、二〇一九年の日本（に住む私たち鑑賞者＝死者の側）」および八段落（レキュトスの壺絵に戻せば～）の「同じ時間と空間にあるものしか人は見ることができないし聴くことができない。だから二人は別の世界に距てられている（したがって「別の世界」＝「時間と空間を異にした世界」）」といった表現に対応する要素。

■要素Ｃ「生者と死者は互いの存在を意識しつつも」：２点

・「『二つの別の世界の交差』とはどういうことかの説明。
・本文の「ここに描かれている人々は、互いの存在を意識しつつ」あるいは「二人の存在が［…］〈たましい〉においてかろうじて交流している」に対応する要素。

■要素Ｄ「触れ合うことはできない」：２点

・「『二つの別の世界の乖離』とはどういうことかの説明。
・本文の「ここに描かれている人々は、［…］触れ合うことができない」「二人の存在が現実的には乖離しつつ」に対応する要素。

■要素C・D共通

・傍線部の「交差」「乖離」を説明なしにそのまま用いている場合、0点。

・「交差」「乖離」を説明する部分の主語がない場合、あるいはその部分の主語が「死者の世界と死者の世界」「ここに描かれている人々」の場合、0点。

■要素E　文末表現は「……こと。」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問二

■形式上の不備
・文末表現は要素Ｄ参照

基準　配点８点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　感覚器官としての耳がいま、ここの一点で捉えた音とは異なり、B旋律＝音楽は、その音の連なりであり、C特定の時間や場所を超えたものだということ。（６９字）

■採点方法：各要素単独採点

■要素Ａ「感覚器官としての耳がいま、ここの一点で捉えた音とは異なり」：３点
・傍線部の「旋律＝音楽」と対比されている「音」の説明。
・本文の「私たちが持つ『現在という時』の意識は、私たちの感覚すなわち視覚や聴覚によって裏づけられているけれど」に対応する要素。「感覚器官によって捉えられる音は『いま、ここ』という特定の時間、空間に位置づけることができる」といった内容になっていればよい。
・「感覚器官」「感覚器官としての耳」などの表現はなくても許容する。

■要素Ｂ「旋律＝音楽とは、その音の連なりであり」：３点
・傍線部の主語の説明。同時にその説明が傍線部の飛躍を埋める「理由」（なぜ旋律＝音楽は、特定の時間や空間に位置づけられないのか）の説明になっていなければならない。
・傍線部の「感覚から導かれる旋律＝音楽は」および本文の「その音楽＝旋律は現在という瞬間を超えた（最低でも前後の時間の）広がりを持ち、空間としても一点の位置を超えた広がりを持って把握される」に対応する要素。
・（「音」が特定の時間や空間に位置づけられるのに対し）「音楽＝旋律」はその一つひとつの「音」が連なった広がりである（だから特定の時間や空間に位置づけられない）、という内容になっていれば、表現の幅は許容する。

■要素Ｃ「（音楽＝旋律は）特定の時間や場所を超えたものだということ」：２点
・傍線部の「旋律＝音楽は、結局はその時間や空間に位置づけられない」および本文の「音楽＝旋律は特定の時間や場所を超えており」に対応する要素。
・「日常の時間や空間を離れた外にある」「音楽＝旋律は現在という時間からも場所からも疎外されている」などの表現も可。

■要素Ｄ：文末表現は「……こと。」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は１点減点。

問三

■形式上の不備
・文末表現は要素D参照

基準　配点８点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。
A　　B　　A
芸術作品は、現実のどこにも属さない場所を人々に経験させることで、特定の現実に縛られない開かれた公共性を可能にするということ。（６２字）

■採点方法：各要素単独採点＋（BゆえにAが可能になる）という関係の要素

■要素A「芸術作品は、特定の現実に縛られない開かれた公共性を可能にする」：３点
・芸術作品の持つ力、可能性の説明。
・本文の「もし芸術作品が既存の政治に縛られない、開かれた公共性を可能にするものだとすれば」に対応する要素。
・「共感能力を作動させ、共感を可能にする」などの表現も可。

■要素B「現実のどこにも属さない場所を人々に経験させることで」：３点
・「不在＝ネガティヴの場所を経験させる」の説明。
・本文の「現実のどこにも属さない場所」に対応する要素。
・「現実において」はそのまま用いても可。あるいは「実際に」（経験させる）などでも可。また、「～に経験させる」という表現があれば、それは「現実において経験させる」と同義とみなしてよい（「現実において」のパラフレーズはなくともよい）

■要素C：（BゆえにAが可能になる）という関係の要素：２点
・Bの内容が×の場合、Aが正しく説明されていても０点。

■要素D：文末表現は「……こと。」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は１点減点。

問四

■形式上の不備
・文末表現は要素E参照

基準　配点13点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A ネガティヴ・ケイパビリティとは自らの現実を否定的なものとして受け入れる能力であり、そ B れは現実のどこにも属さない場所、C すなわち全ての人に開かれた場所 B を人々に経験させるが、D そのような場所の経験こそがあらゆる対立を乗り越える可能性を開くから。（１２０字）

■採点方法：各要素単独採点

■要素A「ネガティヴ・ケイパビリティとは自らの現実を否定的なものとして受け入れる能力である」：3点
・本文の「自分たちの現実を否定的なもの、不在のものとして受け入れる力（つまり、自らの存在を贖罪することのできる）ネガティヴ・ケイパビリティ」に対応する要素。

■要素B「ネガティヴ・ケイパビリティは現実のどこにも属さない場所を人々に経験させる」：3点
・本文の「その経験は自分が人間社会、その時間と空間に属しているという自覚を放棄させる。それを可能にするのがネガティヴ・ケイパビリティである」に対応する要素。

■要素C「現実のどこにも属さない場所とはすなわち全ての人に開かれた場所である」：3点
・本文の「この道は永遠に人々みんなのために開かれている」「確かにこの光景には誰もいない（つまり誰にも占拠されていない）」に対応する要素。

■要素D「そのような場所の経験こそがあらゆる対立を乗り越える可能性を開く」：4点
・本文の「相いれない距たった場所とは生者と死者、彼岸と此岸に限らない。敵と味方、白か黒か、正しいか誤りか、相対するだけで決して解決できない論争、紛争、対立のすべて、これら私たちの生に膠着する煩わしいだけの問題を乗り超える可能性を、キーツはネガティヴ・ケイパビリティに見出そうとしていたのだ」および「この不在の場所ですべての〈たましい〉が出会うことができる、和解することもできるだろう」に対応する要素。

■要素E：文末表現は「……から。」が原則。不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問五　漢字の書き取り　各1点×3

a　弾
b　翻弄
c　周縁

★２０２２年度　東大本番レベル模試　第１回　第二問（古文『狭衣物語』）　採点基準

（一）文科イ・理科イ　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　A1いはけなくB1ものせさせたまひC1しより、

［解答例］　A1あどけなくてB1いらっしゃっC1た頃から、

［採点方法］　各要素単独採点。B・Cには条件あり。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

※ 主体「姫君（宮）」の補いの有無は不問。「姫君（宮）」以外の人物が補われている場合は全体からマイナス１点とする。

A【１点】いはけなく　→　あどけなくて

※「あどけなく・あどけない様子で」、「幼くて・幼く・幼い様子で」、「子供っぽく・子供っぽくて・子供っぽい様子で」でもよい。

B【１点】ものせさせたまひ　→　いらっしゃっ

※Aが×の場合は得点できない。

※「おられ」でもよい（「ある・いる」＋尊敬の意があればよい）。

C【１点】しより　→　た頃より

※Aが×の場合は得点できない。

※ 過去（～た）＋「頃（時・時分など）」の補い＋「から・より」があればよい。どれか一つの要素が欠けても×。

（一）文科エ・理科ウ　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　A1 堰きかね B1 たまへる C1 けしき

［解答例］　A1 涙をこらえかね B1 ていらっしゃる C1 様子

［採点方法］　各要素単独採点。B・Cには条件あり。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

※ 主体「中将（狭衣・狭衣中将）」の補いの有無は不問。「中将（狭衣・狭衣中将）」以外の人物が補われている場合は全体からマイナス１点とする。

A【1点】堰きかね　→　涙をこらえかね

※「涙を」は「泣くのを」等、「こらえ」は「我慢し・堪え・抑え。とめ・やめ」など、「かね」は「できず・難しく」等でもよい。

※「涙を」・「こらえ」・「かね」のどれか一つの要素が欠けても×。

B【1点】たまへる　→　ていらっしゃる

※Aが×の場合は得点できない。

※「お～になっている・お～になった・なさっている・なさった」でもよい（尊敬＋存続・完了の意があればよい）。

C【1点】けしき　→　様子

※Aが×の場合は得点できない。

※「ありさま・姿」等でもよい。

（一）文科キ・理科オ　傍線部を現代語訳せよ。　【３点】

［傍線部］　Ａ１御心地例ならぬさまにて、Ｂ２奥ざまに入らせたまひぬる。

［解答例］　Ａ１御気分が悪い様子で、Ｂ２奥のほうへお入りになってしまった。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

※ 主体「姫君（宮）」の補いの有無は不問。「姫君（宮）」以外の人物が補われている場合は全体からマイナス１点とする。

Ａ【１点】御心地例ならぬさまにて、　→　御気分が悪い様子で、

※「気分が悪い様子で」の意があればよい。「気分」は「気持ち」等、「悪い」は「すぐれない」等、「様子」は「ありさま」等でもよい。

※「御気分」の「御」はなくてもよしとする。

※「普段と違って・並々ならない」など「例ならず」で訳せているものも可。

※「様子で」の「で」は「であって」でもよしとする。

Ｂ【２点】奥ざまに入らせたまひぬる　→　奥のほうへお入りになってしまった。

※「奥へはお入りになった」（「奥へ入る」＋尊敬＋完了）の意があればよい。

※尊敬の意、完了の意がない場合は、それぞれ、Ｂ全体の点からマイナス１点とする。

文科（二）・理科（二）　傍線部「…」とは誰のどのような様子か、説明せよ。　【５点】

［傍線部］　近まさりはいま少し類なく

［解答例］　A1 宮の、B1 近くで見ると、C3 普段見るよりもさらに優って美しく感じられる様子。

［採点方法］　各要素単独採点。A・Bには条件あり。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

A【1点】宮の、

※Cが0点の場合は得点できない。

※「姫君の」でもよい。

B【1点】近くで見ると、

※Cが0点の場合は得点できない。

※「近づいて見ると」等でもよい。

※「近くだと」のように「見る」がないが「近くで接すると」の意ととれる場合は【1点】。

※「近所で・最近」等の意となっている場合は×。「近くだと」等でも、「近所で・最近」等の意ととれる場合は×。

C【3点】普段見るよりもさらに優って美しく感じられる様子。

※「美しい」1点、「さらに・より一層」1点、「優って・この上なく・たいそう」1点。

文科（三）・文科のみ　傍線部「・・・」とはどのような人のことか、誰のことを言っているのか明らかにして説明せよ。【５点】

［傍線部］　A２いとかう世に知らぬB２物思ふ（C１）人

［解答例］　A２この世に二人といないほどにひどくB２恋に思い悩んでいるC１中将のような人。

［採点方法］　各要素単独採点。Aには条件あり。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

A【２点】この世に二人といないほどにひどく

※Bが０点の場合は得点できない。

※「この世に二人といないほどに（またとないほどに・他と比べ物にならないほどに・誰にも負けないくらい　等）」の意があれば【２点】。
　この意があれば「ひどく（この上なく・たいそう・とても・実に・非常に　等）」はなくてもよしとする。

※「またとないほどに」の意がないが「ひどく（この上なく・たいそう・とても・実に・非常に　等）」の意がある場合は【１点】。

B【２点】恋に思い悩んでいる

※「恋に悩む」の意があれば【２点】。「恋に」の意がないが、「悩む」の意がある場合は【１点】。
　「どうしてよいかわからない」は「悩む」と同意とする。

※「悩む」の意がない「恋する・宮（姫君）を思慕している」等は【１点】。

C【１点】中将のような人。

※解答のどこかで「中将（狭衣・狭衣中将）のような人」の意が説明されていればよい。

文科（四）・理科（三）　傍線部「・・・」とあるが、中将は、宮がどうすれば思い出になると言っているのか、説明せよ。　【６点】

［傍線部］　この世の思ひ出でにし侍るべき

［解答例］　A４中将の恋心を理解し、B２今までよりも好意を感じてくれれば。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

※全体の主体としての「宮（姫君）が」の有無は不問。

A【４点】中将の恋心を理解し、

※「自分の恋心」など、「中将（狭衣・狭衣中将）の」となくても中将とわかるものは許容。誰の心かわからない場合のみ、マイナス１点。

※「恋心」は「愛情・恋情・思慕する気持ち」等でもよい。「愛・恋」の意がない「思い」となっている場合は、マイナス１点。これらに相当する表現がない場合は×。

※「恋心」に対する修飾語としての「姫君（宮）に対する」という表現の有無は不問。

※「理解し」は「知り・受け入れ」等でもよい。

B【２点】今までよりも好意を感じてくれれば。

※「好意を感じ」は「好意を持ち・関心を寄せ・思いを寄せ・愛情を抱き・愛し」等、また、「うとましく思わない」等でもよしとする。これらに相当する表現がない場合は×。

※「今までよりも」は「これまでの年月よりも・今以上に・さらに・もっと」等でもよい。これに相当する表現がない場合は、マイナス１点。

※文末表現は「～ば。」が望ましいが、「思い出になる」・「～こと。」等でもよしとする。

文科（五）・文科のみ　傍線部「・・・」とあるが、「同じさま」とはどのような状態か、説明せよ。　【５点】

［傍線部の和歌］　同じさまにて伏したまへる

［解答例］　Ａ３中将に腕をつかまれた勢いでＢ２突っ伏してしまったままの状態。

［採点方法］　各要素単独採点。　［字数］　指定なし。

［ポイント］

Ａ【３点】中将に腕をつかまれた勢いで

※「中将に腕をつかまれて」の意があれば【３点】。「つかまれ」は「とられ」等でもよい。

※「腕」は「手」でもよしとする。「腕（手）を」がなく「つかまれて（とられて）」に相当する表現がある場合はマイナス１点。

※「中将に」に相当する表現がない場合はマイナス１点。

※「中将が腕をつかむ」の意はあるが、これがＢの「伏す」の原因として書かれていない場合はマイナス１点。

※「勢いで・恐ろしさのあまり」等の有無は不問。

Ｂ【２点】突っ伏してしまったままの状態。

※「突っ伏した状態・うつ伏せた状態・倒れた状態・横になった状態・転んだ状態」などの意があれば【２点】。
　ただし、「腕に伏した」となっている場合は【１点】。

※文末表現は「状態。」が望ましいが、「様子」等でもよしとする。

２０２２年度　第１回　東大本番レベル模試　第３問（漢文）　採点基準

（一）

b　a **邪説**　b **になる。**　（２点）

a　「姦説」の言い換え　１点

「邪説」

「悪い説」

「正しくない説」

「よくない説」

「まちがった説」　など○

「嘘の説」

「よくない考え」

「悪い言葉」

「まちがった文章」　など×

b　「～と為る」の訳　１点

「～になる」

「～となる」

「～とされる」

「～と見なされる」　など○

「～と見なす」

「～とする」　は×

c　a何も変わっていない　bのである　（2点）

a　「未だ嘗て改まらざる」の言い換え　2点

「何も変わってはいない」

「全く変わっていない」

「一度も改まったことはない」

「まだ一度も変わったことはない」

「一度も生え変わったことがない」　など○

「まだ改めたことがない」

「変化しなかったことはない」　は×

b　「也（なり）」の訳出は不問とする。

f（理科はe）　どうしてそうなるのか。　（2点）

※読み方は「孰か之をして然らしむるや」

「どうしてそうなるのか」
「どうしてそのような変化がおきるのか」
「何がそうさせるのか」
「なぜそうなるのか」　など○
「誰がこれをそうさせるのか」
「誰が言をそうさせるのか」　も○

「誰がこれを使うか」
「どちらがこれをそうさせるのか」
「どうしてそうなるのだろうか（反語）」　などは×

（二）

a小人の言葉も、　b君子が言うと、　c正しいものと見られる　dということ。（6点）

a「小人の言を以て」の要素　2点

「小人の言葉でも」

「小人の言ったことも」

「内容が小人の言葉も」　など○

※「小人」はそのままでよいという注記があるが、「つまらぬ人間」のようにしていても可。「子供」になっていれば×

b「君子の口を借りて之を発すれば」の要素　2点

「君子が言うと」

「君子の口から言うと」

「君子の口から発せられると」

「君子から聞くと」　など○

※「君子」はそのままでよいが、「人格者」「学問教養のある人」のようにしていても可。「王」「為政者」になっているものは×

c「天下其の正を見て其の邪を見ず」の要素　2点

※「天下は」「世間は」「人は」などの有無は不問。

「正しいものと見られる」

「正しいとされる（する）」

「正しいものと見る（見なす）」

「正しいとし邪とは見なさない」

「邪なものとは見ない」

「正しいと信じ込む」　など○

「間違いに気づかない」

「長所ばかり見ようとする」　は×

※「同じ言葉でも、誰が言ったかで正にも邪にも受け取られる」のようでも○

※「君子が言えば何を言っても正しくなる」は△−2点

d　文末の「〜ということ」の有無は不問とする。

（三）

a春気の訪れや秋気の訪れによって、　b木が変化するように、　c言葉も、

d気の加わり方で変化する　eということ。　（8点）

a b　「～モ亦」の受ける第二段落の内容　4点

※a「春気や秋気の訪れによって」

「気の訪れによって」

「気の変化によって」　の要素　2点

「何かが変われば」は×

※b「木が変化するように」

「木も姿を変えるように」

「木が変化するのと同じく」

「木の様子が変わるのと同様に」

「木が栄えたり枯れたりするように」

「木が盛んになったり衰えたりするように」　の要素　2点

「木が」がないもの　△-1点

「枝や幹が」にしているもの×

c　「言も」の言い換え　1点

「言葉も」

「人の言葉も」

「人の発言も」

「人の言うことも」　など○

※「言も」のままでも○とする

d　ａｂに対置される第三段落の内容　３点

「気の加わり方で変化する」

「万物生成の根元力によって変わる」

「加わる気によって変化する」

「気によって善にも悪にもなる」

「気の加わり方で全く違ってくる」　など○

※「気が加わって」の要素がなく、単に「変わる」「変化する」「変わってくる」などは△−２点

e　文末の「〜ということ」の有無は不問とする。

（四）文科のみ

a 気の加わり方で　b 言葉が一言でも変わると、　c その言葉の善悪は、　d 天と地ほどのひらきになる　e ということ。　8点

a 「何によって」の内容　3点

「気に加わり方で（によって）」

「気によって」　など○

「話す人の人柄（人望）によって」

「話す人によって」　は×

b 「一言移らば」の要素　1点

「言葉が一言でも変わると」

「一つの言葉が変わると」

「一言変化すると」

「言葉の中身が変わると」　など○

「言い方を変えると」

「一言だけ変えると」　などは×

c 「善悪」の要素　1点

「その言葉の善悪は」

「言葉が持つ意味の善悪は」　など○

※ 単に「善悪は」にしているものは△−1点

d　「霄壌なり」の言いたいこと　3点

「天と地ほどのひらきになる」
「天と地ほどのへだたりになる」
「天と地ほどに違ったものになる」
「天と地ほど変わってしまう」　など○

※「ひらきになる・隔たりになる」の説明があれば2点。ない場合は0点。
「ひらきになる・隔たりになる」の説明があった上で「天と地ほど・大きく」など隔たりの程度の説明がある場合、さらに1点。

「逆転する」は×

※「それは、善と悪、天と地のように正反対になる」はc・d×−4点
cはdになるという説明が必要。

e　文末の「〜ということ」の有無は不問とする。

(五)　文科のみ

g＝気
h＝言　二つとも○で2点
※　正答以外は×

第四問（２０点満点）

■採点の原則
① 全ての答案について各要素単独採点とするが、答案が全く日本語の文（章）の体をなしていないと判断される場合は、要素の有無に関係なく０点とする。
② 漢字の誤り、送り仮名の誤り、句点の抜けについては、一つごとに１点減点する。

問一

■形式上の不備
・文末表現は要素Ｄ参照

基準　配点５点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。
A 長いこと日記をつけているが、B 昔書いたものと最近のものとをいれ変えてみても違和感がない C ほど、そこに書かれた行動や思考内容に変化がないから。

■採点方法：各要素単独採点
・「日記」という表現が含まれていない答案は、傍線部の理由となりえないため、要素ＡＢＣの有無にかかわらず、０点。

■要素Ａ「長いこと日記をつけているが」：１点
・本文の「一　頁（ページ）に二日分書ける日記帖を重宝していて、もう二十年ほどにもなる」に対応する要素。
・「十年ほど前に書いた日記の内容と変わっていない」などの、長年にわたって日記を書いていたことが間接的に分かる内容が含まれていれば加点してよい。
・曖昧な表現、不正確な表現の場合、０点。
・「日記」という表現が含まれていない場合、０点。

■要素Ｂ「昔書いたものと最近のものとをいれ変えてみても違和感がないほど」：２点
・本文の「十年ほど前に、していたこと考えていたことと、昨日今日のそれとをいれ変えてみても、オヤっと気づく程のものもないくらい」に対応する要素。
・同等の表現であれば広く許容して加点してよい。
・曖昧な表現（指示語の指示内容が不明瞭など）、不正確な表現の場合、１点。

■要素Ｃ「そこに書かれた行動や思考内容に変化がない」：２点
・傍線部の「随分進歩しない人間だなあと呆れる」の理由となる要素。
・同等の表現であれば広く許容して加点してよい。
・曖昧な表現、不正確な表現の場合、１点。
・「生活に進歩がない」のではなく「人間に進歩がない」のだから、「変わりばえのしない生活」「平々凡々の暮らし」などの表現の場合、１点。

■要素Ｄ：文末表現は「……から。」が原則。不適切な文末表現と判断される場合は１点減点。

問二

■形式上の不備
・文末表現は要素D参照

基準　配点5点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A 変化のない日々の茶飯事を書くだけの日記であることだし、B 老い先短い自分が C 来年分の日記を早めに買って使う前に死んだら勿体ないと思うから。

■採点方法：各要素単独採点

■要素A「変化のない日々の茶飯事を書くだけの日記であることだし」：2点
・「日記にかぎって」という、他の必要性の高いものとは異なる日記の性質を説明する部分。

・本文の「日常茶飯事や一寸（ちょっと）した感想を七、八行、大きな字で書くのだから大して苦にならない。平々凡々の暮らしだから、読み返してみても、辛気くさくて、いっこうにパッとしたところがない」「（日記をつけることも）ひょっとしたら、死ぬまでの時間つぶしの一種か、と考えられぬこともない……」などに対応する要素。
・「平々凡々の暮らしの茶飯事を書きつけるだけの日記には（死ぬまでの時間つぶしともいえるような日記には）、石油などの日々の必需品に比べて切迫した必要性も感じられない」といった意味合いが込められていれば加点してよい。
・説明が曖昧であると判断される場合や不正確な表現の場合は1点。

■要素B「老い先短い自分が」：1点
・「老境にある自分は、いつまで生きていられるかわからない」という内容を説明する部分。「死を身近に感じている自分にとって」など、同等の表現であれば加点してよい。
・説明が曖昧であると判断される場合は加点なし。

■要素C「来年分の日記を早めに買って使う前に死んだら勿体ないと思う」：2点
・本文の「結局は当方のケチ根性であろうと思う。ぎりぎりまで、十二月のせめて中旬ごろまで、それまではまだ残っているだろう、急いで買って、（ここからがおかしい）急にコロリと死んでしまったら勿体ない……」に対応する要素。
・同等の表現であれば加点してよい。
・説明が曖昧であると判断される場合は、1点。

■要素D「から。」：明らかに不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問三

■形式上の不備
・文末表現は要素C参照

基準　配点5点

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。

A　退屈な仕事の合間に撮られた、ぞんざいでそっけない顔をした母親の写真は、　B　自分の中の母親像を最もよく表しているように思えるということ。

■採点方法：要素Bが満たされていなければ、要素Aの内容如何に関わらず、加点なし。

■要素A「退屈な仕事の合間に撮られた、ぞんざいでそっけない顔をした母親の写真は」：3点

・本文の「仕事中にいきなり陽のあたるところへ引張り出されたので、少々迷惑そうな、それでも息抜きができて嬉しくないこともない顔をして、そんなふところ手みたいなぞんざいな姿でもっさりと写っている」に対応する要素。
・ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点してよい。
・「監視役をしている母親の写真は」「寒そうに、場外に立って風に吹かれている母親の写真は」など、要素Bの「母親らしい姿」につながらない表現の場合は加点なし。

■要素B「自分の中の母親像を最もよく表しているように思える」：2点

・傍線部の「いちばんそれらしく見える」の説明。
・「自分の中の母のイメージをいちばんよく表している」「最も母親らしく見える」「母親の素顔を何よりもよく写している」など、ほぼ同等の説明内容であると判断できれば、3点。
・「母親の人生を～」「母親の生き方を～」など、説明が曖昧あるいは不正確であると判断される場合は加点なし（その場合は、要素Aの内容如何に関わらず、0点）

■要素C：文末表現は「……こと」という形が原則。不適切な文末表現と判断される場合は1点減点。

問四

■形式上の不備
・文末表現は要素C参照

基準　配点５

■模範解答例　※各要素同意表現可。ニュアンスが正しければ許容。
A　残された人生を死ぬまでの時間つぶしと見なす老婦人の言葉に反発を覚えつつも、　B　そうした考えに傾きがちな自分がいることも否定しきれないでいる。

■採点方法：各要素単独採点

■要素A「残された人生を死ぬまでの時間つぶしと見なす老婦人の言葉に反発を覚えつつも」：２点
・本文の「「死ぬまでの時間つぶし」と、そっけなく言ってのけたあの老婦人の顔を、はっきり覚えていないことは思えば私の倖せだったかも知れぬ」および、傍線部の「あの日の日記と一緒に、早く忘れることにしようと思っている」に対応する要素。
・ほぼ同等の説明内容であると判断できれば加点してよい。
・説明が曖昧であると判断される場合は１点。

■要素B「そうした考えに傾きがちな自分がいることも否定しきれないでいる」：３点
・傍線部「あの日の日記と一緒に、早く忘れることにしようと思っているのだが」の「だが」の後に省略されている内容を補う要素。
・「老婦人の考え方に引きずられてしまいかねない自分もいる」など、同等の表現であれば加点してよい。　。

■要素C：文末表現は、心情を表す表現や、心情の内実を示す表現、「……という心情。」など、問いに対して適切な文末表現であれば広く認める。「……から。」などの不適切な文末表現の場合は１点減点。